

ニューヨーク日本人学校での実践を通して

前ニューヨーク日本人学校 教諭

千葉県いすみ市立大原中学校 教諭 露 崎 史 哲

キーワード：在外教育施設、現地校訪問、ニューヨーク日本人学校、Lesson Study Open House

1. はじめに

ニューヨーク日本人学校での3年間の研修期間において、現地校の授業を参観する機会やアメリカ人教師との情報交換は貴重な経験となった。小学校から高校まで、様々な成長段階の授業を見学した中で感じたことは、自分の考えを「伝える」ことに重点をおいていることである。それぞれが自由なスタイルで考え、自由に発表している姿と、他者の発表を受容しようとする姿勢に驚いた。ここにその概略を紹介したい。

2. 現地校の授業視察

(1) Clarks town High School North (Clarks town, New York)

クラークスタウンはNY州マンハッタンから車で北に1時間、緑と湖が美しい郊外にある。このまちにあるClarks town High School NorthにはGrade9～12（日本の中3～高3）が通っている。この学校の教育課程は大変充実しており、一般的な科目の他にそれぞれの科目において、アドバンスド・プレースメント・テスト（Advanced Placement Test）に向けて準備するAPクラスや、国際バカロレア資格（International Baccalaureate）を取得するためのIBクラスがある。また、障害による学習の困難、特別なケアの必要な生徒を支援する特別教育（Special Education）もあり、様々な教育的ニーズに対応している公立の高校である。

訪問の際には、それぞれの生徒1人ずつに各パートナーがつき、普段パートナーが受けている授業と一緒に参加した。また、訪問した2016年の5月下旬に、当時のオバマ大統領が歴代大統領として初の広島訪問と時期が重なったため、日本語コースの授業では「オバマ大統領は広島で謝罪をすべきか」というテーマでディベートを行った。自分の意見を堂々と英語で発表している生徒もおり、日本人とアメリカ人の感じ方の違いについて、貴重な意見交換の場になった。

招待の際には、「日本の文化を紹介する」を目標に沿って、日本の昔の遊びや、アニメ、書道、剣道などを紹介し、実際に経験してもらった。現地校との交流では、生徒たちのコミュニケーション能力の向上はもちろん、普段は入試に向けての受験英語に力を入れている生徒たちが生きた英語に触れ、多くを吸収する絶好の機会となった。アメリカに住む同世代がどんなことを学び、そこからどのように思考しているかを知る貴重な体験になったことは間違いない。



9年生の学校間交流（訪問）

オバマ大統領（当時）が広島に訪問した時期（2016）だったため「大統領は広島で謝罪すべきか」というテーマで討論会を行った。日米の原爆投下に対する考え方の違いに驚かされた。

(2) Greenwich High School (Greenwich, Connecticut)

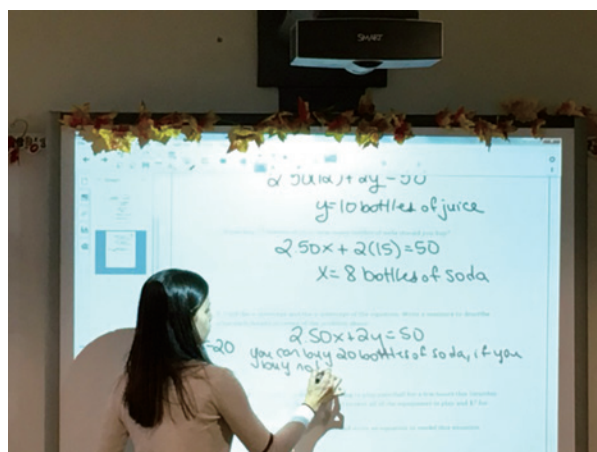
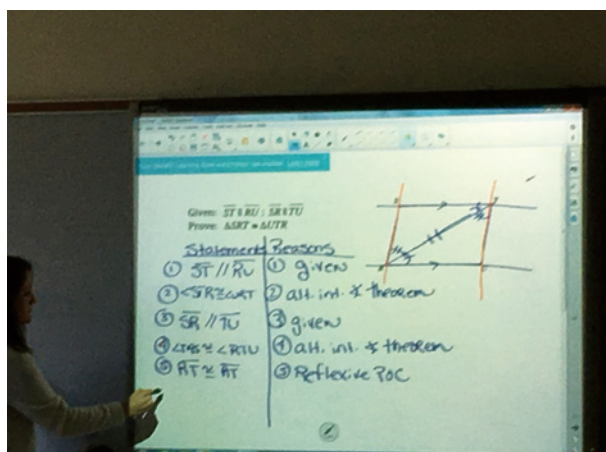
ニューヨーク日本人学校があるコネチカット州グリニッチには公立の学校として、11の小学校、3つの中学校、1つの高等学校と10以上の私立学校（日本人学校もここに含まれる）がある。グリニッチは全米でもトップクラスの富裕層が住む町であるため、教育予算も潤沢で、公立学校も全米で教育水準はトップクラスにある。児童生徒は小学校に入学と同時に1人1台のタブレットが貸与され、学年が上がるにつれ、教科書はデジタル教科書を

使用するようになる。(教科書が分厚く重いので、持ち運びに全く適していない) 教師からの課題も Web 上にアップされ、提出も Web 上に行く。データの管理はクラウド上でやっているため、教師も児童生徒もネット環境につながる所にいればどこでも見ることができ、提出状況の確認、添削、評価、評価のフィードバックができる。

また、日本と違い学年で足並みを揃えて、みんな一律にという授業は行わない。テストを受け、親の承諾が得られれば能力に応じて飛び級ができる。しかも、全教科というわけではなく、数学だけとか英語だけとか教科ごとにできる。グリニッチの場合、2 学年上まででき、特別に能力が高い児童生徒 (Gifted と呼ばれる) については、さらにプラス 2 学年まで飛び級ができる。(現地校から日本人学校に転入してくる児童生徒は数学で飛び級していることが多い)

Greenwich High School は、9 ~ 12 年生 (日本の中 3 ~ 高 3) にあたる 3000 人の生徒が通うマンモス校である。数学のクラスは S、A1、A2 の 3 コースにレベル分けがされていて 1 つの授業の中に 3 つの学年の生徒が参加していた。まず生徒たちは、教室に入ると各自のスマートフォンを教室内にある専用 BOX に入れ、席につく。見学した Geometry (幾何学) の授業は A1 クラスで、9 年生から 11 年生が参加していて、内容は合同な三角形の証明を行っていた。(証明を扱うのは、S、A1 クラスだけで、A2 クラスでは証明は取り扱わない)

提示された演習問題に 1 人黙々と取り組む生徒がいれば、周りとは相談したり、アドバイスをもらったりしながら進めている生徒もいた。教師の関わりとしては、机間巡視をしながら、質問があれば答えるというものであった。全ての課題が終わった生徒は教師に申告をし、始業前に預けた自分のスマートフォンを取りに行く。すると教師からは Web 上にある本日の宿題が示され、生徒はその課題に取り組んでいくという流れであった。1 時間の授業を通して、それぞれの生徒が休む間もなく次々に課題に取り組んでいく姿が印象的であった。



左は図形の証明、右は一次関数の授業。証明の流れは日本と同じ。しかし、表し方は箇条書きのように表すのみ。スマートボードを活用。そのため教室はかなり暗い。黒板はほぼ使用しない。

3. 授業公開研修会 ~ Lesson Study Open House ~

(1) 概要

ニューヨーク日本人学校では、2016 年度まで毎年 1 回、普段現地校で指導しているアメリカ人の先生方を招いて授業公開研修会 (Lesson Study Open House) を行ってきた。

(2) 授業についての研究協議

① 中等部の研究

中等部においては、昨年度得られた研究の成果を今年度さらに発展させたいと考え、研究主題を「自ら学ぶ力を身に付け、高め合う授業の創造」と設定した。昨年度重点を置いた「表現力」を高める活動をさらに発展させ、系統的に指導できるよう発達段階に合わせて目標を考えること、そのための具体的な手立てを考え実践すること、具体的な評価の基準や方法を考えることに取り組んでいきたいと考え、研究を進めている。「高め



Lesson Study Open Houseの様子。授業者や生徒の発言を同時通訳しながら授業が展開されていく。中には、見学しながら生徒や授業者に質問をしてくるアメリカ人の教師もいる。

「合う交流活動の工夫」を副題に設定し数学に限らず全ての教科で、研究を進めてきた。各教科において授業内に、意図的に交流活動を設定した。近年、本校でも個々の習熟度の差が大きくなってきている。そのため、全員が理解し主体的に活動する授業作りを目指し、子どもたちの実態に合わせ、研究主題に迫る手だてを設定した。

②授業者自評

今日の授業は、中1の平面図形の内容の最後で、発展的な学習で行った。この後は空間図形に入る。紙という平面図形から鶴という立体的なものを作り、次回以降につなげようと考えた。

授業を行ってみて、正方形で鶴を折った折り目に着目させた。ひし形からそれ以外の平行四辺形などの挑戦もしたかったのだが、時間が足りなかったように感じた生徒もいたと思う。生徒の感想にもあったように、正方形でしか折れないと思っていた鶴が、学んだことを生かすと他の図形でも折れるということにつながった点が授業で学んだことを日常生活に落とし込めた点良かったと思う。

③協議

Q：黒板の書き方で工夫しているところがあるのか？

A：板書については初等部と中等部で違ったり、教科で違ったりする点はあると思う。自分は、年度初めの授業のときに何色が重要など、黒板の書き方のガイダンスを行っている。生徒たちのノートへの記入する際にも、同じような観点で色を付けて、あとで自分が見て分かりやすいように工夫するよう指導している。

Q：コンパスを使ってと指示をしたか？

A：「作図をしなさい」といったので、みんな折らずにコンパスを使って作図を行った。「作図しなさい」と「かきなさい」は使い分けている。「作図」という場合には、使って良いものはコンパスと直定規のみであることは全員理解できている。

Q：今日の授業のポイントは何か？

A：今日の授業のポイントは「長方形で鶴は折れるのか」という発問で「折れない」という生徒の反応から、どのようにしたら折れるのか、なぜ正方形は折れるのかを考え、「学んできたことを生かして、新たな課題が解決する」ところがポイントだった。

Q：鶴の折り方（折り紙）と数学をどのように関連づけたのか？

A：生徒は実生活と学校で学ぶ数学がつながっていない。生徒の中では数学を学習する目的が高校受験のためとなってしまっている。小さい頃から慣れ親しんだ折り紙の中にも数学が潜んでいること。

Q：評価はどのようにしているか？毎回の授業で一人ひとりの成績をつけるのか？

A：評価のポイントは各学期の定期テストだけでなく、単元ごとのテストや発表の際の説明やグループでの話し合いでも評価を行う。しかし毎回の授業の中で評価とまではいかないのが現状である。

Q：宿題はどうしているか？

A：同じ問題集を全員が持っているのをこれを自主的に活用させている。さらに、これとは別にプリント等で宿題を出すこともある。個々のレベルに差があるので、課題をレベル別に分け、生徒たちに選択させる場合もある。

Q：日本に帰国したら生徒は授業についていけるのか？

A：日本の学校には全国一律のカリキュラムがある。こちらでは、多少進度を早くしているので、日本の学校に戻ってもスムーズに授業に入れる。

Q：最初は全員が単独で作業していたが、徐々にグループワークに移行していった。意図したことか？

A：普段からまずは自分で考えてみる。煮詰まってしまったら、周りの人に相談してよいと指導している。煮詰まるまでの感覚は人それぞれなので決めていない。

4. おわりに

現地校を視察したり、アメリカ人の教師から直接話を聞いたりすることで、書籍やインターネットからは学ぶことのできないアメリカの教育事情について肌で学ぶことができた。

「アメリカという英語を学ぶのに、これ以上ない環境にありながら、あえて日本人学校を選んできた児童生徒、保護者の期待を裏切ることにはできない」当時の校長からこう言われ、身の引き締まる思いで始まった赴任も振り返ると、あっという間の3年間であった。生徒たちに母語である日本語で理解し、考え、表現させることを大切にしながら、日々の教育活動に取り組んできた。日本人学校での3年間の研修により、日本の教育を再度学ぶ機会となった。これからも、子どもたちが主体的に学び、成長していける指導ができるように授業力を磨き続けていきたい。

また、アメリカではあらゆる人種が生き、あらゆる言語が飛び交い、見た目も考え方も自分とは全く違う人たちに囲まれての生活だった。そのため、自分自身3年間の生活を経て、以前よりも多種多様な考え方を受け入れられるようになったと感じている。今後はこの経験を生かし、他者との違いを認め、受け入れることができ、そのうえでより良いもの・考え方を生み出していける生徒の育成に力をいれていきたいと思っている。